

THE GUTENBERG GALAXY

The Making of Typographic Man

by

Marshall McLuhan

University of Toronto Press, 1962

本書は、グーテンベルグに発した文化が含むさまざまな問題に対して、モザイク的なアプローチを採用することにより、歴史の中で現実に機能してきたもろもろの因果関係を明らかにするものである。技術が新しい人間環境を創り出す能動的過程を記述することを目的としている。

非文字社会においては、さまざまな関係が暗示的、同時発生的、非連続的である。全ての経験を音声に基づいて組織化する強度な聴覚強調のもとにある。この社会では原因と結果が間髪を入れずに相互作用し合う事で相互依存の体制が生まれる。また、眼は見通すために使われるのではなく、触知するために用いられる

表音アルファベットは、象形文字が表現されたものとの間にもつような描写的関係を一切持たず、恣意的な記号によって世界を表現する。音素という、有限な等質の断片に分けられ、それらの組み合わせによって表現される。アルファベットが持つこのような均質性はグーテンベルクの活版印刷の発明によってますます視覚化されることとなる。そして、印刷されたページが持つ視覚的な均質性から、それが表現しているとされる世界自体も均質なものであると思ひ組むようになった。

活版印刷の特色には、世界を断片の組み合わせとして表現するほか、断片を順序だてて並べてゆくという線形性がある。これは同時共存を許さず、優先順位を生み出す。これらの特色は印刷によりすべて視覚化されている。ナショナリズムは、印刷により各民族の国境が、また統計資料のかたちでそのすがたが見えたときにおこった。世界が展望の対象になると、視点をどこに置くかという問題が重要である。この視点の強調がユニークな視点の所有者としての個人主義を発生させた。視点の強調は、分断された競争社会を作り出し、人間の幸福とはユニークな視点を作り出すこととなった。

また、無意識は深層心理における意識であり、深層心理の存在は人間にとって自然な状態ではなく、人間の神経機能の一部が抑圧されるときに生じる、とマクルーハンは説く。印刷文化は、人間の視覚の役割を異常なまでに高めた。そのため他の諸感覚、触覚や聴覚が不当な抑圧を受けるにいたった。このとき五感の比率は均衡を失い、触覚や聴覚から得られる情報は、無意識のかたちをとるようになった。

印刷に代表されるような機械化の時代に対して、現代の電波時代においては、それまでの機械化時代とは完全に性質を異にし、非文字時代の人間の感性に戻る時代であると、著者は主張している。即ち、電信・テレビ・ラジオの出現により、印刷技術に伴った均質化を崩壊させ、視覚的空間を捨て、聴覚的空間へと移行する。そして、人間は五感を全て駆使して大脳に伝えられた記号象徴を把握して意味を創造していくことで、人間の未来への希望が見出せていくとしている。活版印刷革命と、電子技術革命の両方が持つ意味をしっかりと把握することを願う、メッセージを残している。

マクルーハンは、印刷術が私有財産、プライバシー、そしてさまざまな形式の「囲い込み」の手段となり、名声と永続的な手段を手に入れる直接の手段となったこと、また、著者であるとか、偽作の問題に人々が関心を持ち始めるのは、消費者中心の文化なのである、としている。Napster 問題等が引き起こしている著作権問題の考察の一助になるまいか。